

郊外の若者に渦巻く怒り フランスには「人種差別と戦う勇気」が必要

有料記事

聞き手・宋光祐 2023年7月11日 8時00分

コメントプラス

浅倉拓也さんのコメント



パリ第8大学のファビアン・トリュオン准教授=本人提供



パリ郊外で北アフリカ系の少年(17)を警官が射殺した事件をめぐり、フランス各地で抗議行動が起き、暴動に発展しました。フランスでは、人種をめぐる不平等や経済的な格差についての議論が再燃しています。暴動は、なぜ郊外で広がったのでしょうか。移民にルーツを持つフランス人の若者たちは、どのような思いを抱えているのでしょうか。この問題に詳しいパリ第8大学のファビアン・トリュオン准教授に聞きました。

「あれがフランスの本当の顔だ」 デモに参加した移民系若者の怒り →

——1人の北アフリカ系少年の射殺事件がフランス全土での暴動につながりました。その逮捕者の多くは若者たちです。背景には何があるのでしょうか。

低所得者や移民が集まる大都市の郊外で暮らす少年たちの直感的な怒りです。そうした地区では、住民と警察の緊張関係は30年以上前から変わっていません。

暴動が映し出した「トラウマの歴史」

そこでは、移民の親を持つ少年たちのほとんどは、警察から理由もなく身元確認を求められ、嫌な思いをした経験を持っています。「射殺されていたのは自分だったかもしれない」。そんな思いから生まれた警察に対する怒りが、若者たちの間に広がりました。

暴動に対しては、移民や貧困層が多く住む地区の住民も非難の声を上げています。なぜならば、暴動で学校や公共施設が壊されたことの代償を払うのは、皮肉なことに、そうした地区の住民だからです。一方で、怒りに理解を示す住民もいます。

今回の暴動が浮き彫りにしたのは、移民系のフランス人が世代を超えて抱える「トラウマの歴史」です。

——アフリカやアラブ系の親を持つフランス人の若者たちは、フランス人としてのアイデンティティーを持つことに困難を抱えているのでしょうか。

「純粋なフランス人ではないこと」に悩む移民系の若者たち

「バンリュー(郊外)」と呼ばれる大都市の郊外に住む若者らの調査をするなかで、ある若者は私にこう言いました。「ぼくの問題は、フランス人かどうかではなく、純粋なフランス人ではないことです」

こうした若者たちは、極右勢力の攻撃の対象になり、「名前を(フランス人風に)変えるべきだ」「イスラム教徒でありながらフランス人であることはできない」などと言われています。しかし、彼らはフランス人なので、問題は、フランス社会が多様性のある若者たちを受け入れるのに困難を抱えていることです。

今回の暴動では、学校や図書館が狙われました。それは若者たちにとって重要な存在だからです。親から自分たちの置かれた状況を乗り越えてほしいという期待を背負い、学業で成功したい、社会で認められたいという自分の思いもある。それが潜在的なフラストレーションを生んでいる。公的な施設への攻撃は、社会で行き詰まりを感じている若者の「絶望の叫び」です。

——暴動が広がった地域は、低所得層の移民が多く住み、1970年代や80年代にニュータウンとして整備された場所だとされています。「バンリュー」と呼ばれるこうした地域を、フランス政府は見捨ててきたという批判もあります。

政府が何も対応しなかったとは言えません。アラブ系とアフリカ系の少年2人が警察に追われた末に死亡する事件をきっかけに広がった2005年の暴動後、政府は 公的資金 を使って老朽化した建物の改修や交通機関の整備を進め、都市の再生に取り組んできました。

しかし、それだけでは十分ではありません。最も必要なのは、教育と若者たちへの支援です。教育や社会福祉に関する予算はむしろ削減されました。困難を抱える生徒が多い学校では、一つの学級を少人数にして指導する必要がありますが、教員や社会福祉の仕事に携わる職員の給与は低いままです。政府は建物や交通に投資してきましたが、人に対する取り組みが足りていないのです。

——フランスは人種や民族ごとの統計を取らないとされています。その原則は郊外の移民系フランス人が抱える問題の解決につながるのでしょうか。

民族や人種に関する統計は、研究目的であれば認められており、完全に禁止されているわけではありません。

フランスは差別に立ち向かう勇気を持つべき

現実として、フランスに人種差別が存在する中で、社会階層や肌の色による警察からの身元確認の頻度の違いなどを客観的なデータで分析することが必要ですが、現状はそうなっていません。

フランスは、社会全体が差別的というわけではありません。フランス人が好きな有名人には、サッカーのエムバペ選手や俳優のオマール・シーなど移民のルーツを持つ人たちが何人もいます。最も売れている音楽のジャンルはラップです。

それでも、人種差別の存在を直視しなければなりません。「普遍主義」を重んじて国民のすべてが同じフランス人であるという立場から、政府は人種ごとに統計を取って問題を解決することをしてきませんでした。人種差別があるならば立ち向かわなければなりません。

貧困層の支援や困難を抱える若者と対話する必要があります。フランスは社会的不平等と戦う勇気を持つべきです。(聞き手・宋光祐)

コメントプラス

[いま注目のコメントを見る](#) >



浅倉拓也 (朝日新聞記者=移民) 2023年7月11日5時57分 投稿

【視点】日本で生きる外国ルーツの若者にも共通する話が多く、考えさせられました。

[…続きを読む](#)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。


Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

仏暴動、揺れるアイデンティティー 移民ルーツ持つ若者ら

有料記事

2023年7月11日 5時00分



警官に射殺されたナエルさんの車がぶつかって止まった交差点の電柱。足元には花束とメッセージが捧げられていた＝5日、パリ郊外ナンテール、宋光祐撮影 



警察が取り締まるのは当然という意見はフランスでも根強い。しかし、ナエルさんが亡くなった電柱の足元にはいくつもの花束が捧げられていた。「ナエルのために正義を」。花束に添えられたメッセージには、少年を悼む思いと警察の行き過ぎた取り締まりへの怒りが感じられた。

ナエルさんが住んでいたという「パブロ・ピカソ地区」に向かった。建設現場や自動車工場で働く外国人労働者のために1970年代から80年代にかけて、低所得者向け公営団地として整備された場所だ。その成り立ちは、貧困層や移民が集まる「郊外(バンリュール)」の典型的なもので、ナエルさんはその団地の一室で母親と暮らしていた。

団地の前の道を歩いていた少年(17)はハイチ系フランス人だと言い、ナエルさんを知っていた。団地の広場でふざけ合う中で、事件後にあった警察への抗議デモにも参加したという。少年は理由もなく警察に身元確認を求められた経験があると話した。

しかし、怒りの言葉の矛先は他のフランス人にも向いていた。「最初は抗議を支持していたのに、警察が動き出したら、みんなが郊外に住む人をバカにし始めた。あれがフランスの本当の顔だ」。フランスで生まれたフランス人なのに、自分はよそ者かのような言葉に孤独がにじんだ。

団地に隣接する公園を訪ねると、燃やされて黒こげになったメリーゴーラウンドが目に入った。その前を通りかかったジネディーヌ・ラクダルさん(26)に声をかけた。パリの郊外で生まれ育ったアルジェリア系2世のフ

警官による少年の射殺事件をきっかけに起きたフランスの暴動は、移民をめぐる仏社会の分断の深刻さを浮き彫りにした。「フランス人として生まれたはずなのに、本当のフランス人とは思えない」。移民のルーツを持つ若者らは自らのアイデンティティーを揺さぶられ、暴動が残した傷痕を複雑な思いで見つめる。

5日朝、パリ中心部から列車で約20分の場所にある郊外の町ナンテール。暴動のきっかけになった少年の射殺事件が起きた町だ。

事件は6月27日朝、起きた。射殺された17歳の少年はナエルさん。アルジェリアのルーツを持つフランス人だった。警官が発砲後、ナエルさんが運転していた車は交差点の電柱にぶつかって止まった。無免許運転とされる少年を

ランス人だった。

暴動には賛同できないが、移民系フランス人に対する差別や警察の厳しい取り締まりに対する憤りには共感していた。自分もつらい経験をしてきたからだ。

17歳のとき、自宅の前で友達とサッカーをしていただけなのに、警察官に身分証の提示を求められ、車に数時間拘束されたことがあるという。高校卒業後に進んだ観光業の専門学校では、卒業に必要な現場実習でつまずいた。白人の同級生はすぐに実習先が見つかるのに、自分は50社に履歴書を送っても返事がない。まもなくあきらめて学校をやめた。

いくつかの職を経て、今年、パリの地下鉄の運転士に採用された。安定した職を得て、ようやく「郊外」から抜け出せたと感じている。それでも、「本当のフランス人ではない」という思いがつきまとう。「毎日そんな気持ちでいるわけじゃない。ただ、職場や旅先、ふとした時に自分への視線が他と違うと感じる」

ナエルさんへの花束が手向けられた場所に戻ると、一人の女性がたたずんでいた。「悲しい」。社会の高校教員だというリザさん(41)はそう漏らした。

フランスでは1980年代から、警察の取り締まりでアフリカ系やアラブ系のフランス人が亡くなる事件をきっかけに起きる暴動が繰り返されてきた。「ナエルの事件が最後であってほしい」(パリ＝宋光祐)

■<考論> 困難抱える若者と対話を パリ第8大学准教授(社会学)、ファビアン・トリュオン氏

今回の暴動の背景には、低所得者や移民が集まる大都市の「バンリュウ(郊外)」で暮らす少年たちの直感的な怒りがある。移民の親を持つ少年のほとんどは、警察から理由もなく身元確認を求められた経験を持つ。「射殺されていたのは自分だったかもしれない」。そんな思いから生まれた警察への怒りが、若者の間に広がった。

アフリカ系やアラブ系のフランス人の調査を続ける中で、ある若者から「ぼくの問題は、純粋なフランス人ではないことだ」と言われた。移民のルーツを理由にフランス人としてのアイデンティティーに悩む若者の存在は、フランスが多様性の受け入れに困難を抱えていることを示している。

現実として人種差別が存在する中で、フランスでは社会階層や肌の色による警察の身元確認の頻度などを分析するデータが十分ではない。政府は「普遍主義」の観点から、国民はすべて同じフランス人であるという立場を重んじてきた。

だが、人種差別があるならば立ち向かわなければならない。移民のルーツに悩み、貧困や困難を抱える若者と対話する必要がある。フランスは社会的不平等と戦う勇気を持つべきだ。(聞き手・宋光祐)